巻頭言

清潔なキャンパスから，美しいキャンパスへ

前岡山大学副学長・
前環境保全委員会委員長
早　津　彦　哉（薬学部教授）

ここ10年ほどの間に人々の生活マナーがずいぶんとよくなったと思う。かつては通勤の途次の歩道に沢山落ちていた空き缶が，最近は見ることが少なくなった。キャンパスのあちこちを歩くことが多い此頃なのだが，不愉快な散らかし放しは少なくなった。ただ依然として目につくのはタバコの吸いがらであり，これは時間のかかる問題だと嘆くばかりである。全体として私のいる津島キャンパスは，ほぼ清潔であるといってよいように思える。

しかし「美しい」と言えるだろうか？上記の「清潔と言える」と表現したのは地面のこと，つまり視線を下に向けていると汚れてはいないということである。ところで視線を平面ないし上に向けるとどうだろうか。確かに背景には半田山が連なり，柔和で温かな雰囲気をもたらしているし，キャンパス内の樹木も豊富で，緑が目を楽しませてくれる。しかし，北米やヨーロッパの著名な大学のキャンパスを訪問して，帰ってきて眺める岡山大学は何だかみすぼらしい感じを受ける。けっして美しいとは言えない。これは私だけでなく多くの人々の感想であろうと思う。

大きなファクターは，建物の様子に壮麗さとか美しい芸術性と言ったものが欠けているせいだろうと思う。またもう一つは，庭の下生えがきれいだとはとても言えないことである。ごみは落ちてないけれども，生えそろった芝生とか，手入れの行き届いた植え込みが多くあるとかいう状況にはない。

これは恐らく日本の国立大学に共通している現況だろうと想像される。しかし，21世紀に入るに当たって，何とか「美しいキャンパス」を作るような「改革」はできないものだろうか。立派な建物ができ，外壁も定期的にきれいにしたら，どれほどよいかわからない。すべて予算の少ないせいになるのだが，日本が世界の一流国家であり，大学も一流なんだと威張れるようになるには，これを何とかしなければだめだと私は強く感じている。教育や研究の充実が叫ばれ，なんとなく後ろめたい気持になる日々であるけれど，美しく素晴らしいキャンパスであれば，どれだけし士気が上がるか知れない。これから10年，20年先にぜひ実現して欲しいと願う。